

青春スクロール

母校群像記

saitama@asahi.com

授業で修学旅行で私の人生が決まった

熊谷女子高校（以下、熊女）からは、若き日に興味を持った分野の研鑽を続け、教職についた人材が数多く巣立った。

昭和女子大付属昭和小中高校（東京都世田谷区）の校長、真下峯子（69、1971年卒）は、熊女入学早々の生物の授業で将来が決まった。受精卵が細胞分裂を繰り返す、動物になる不思議さと面白さ。奈良女子大理学部生物学科に進み、「学ぶ楽しさを子どもに伝えたい」と、公立中学・高校の生物教諭になり、県立高校や大妻嵐山中学・高校の校長も務めた。

2年のときに生徒会長になった。任期中の最大の懸案は制服問題。近くの熊谷高校も「束縛の象徴」として廃止運動で揺れていた。真下は束縛と思わなかった。



真下は自らも学んだ女子高、女子大を「異性を気にせず伸び伸びと過ごせる」と評価する



県立熊谷女子高校4

川島は博士論文を「源氏物語」の源泉と継承」としてまとめ、公刊した



が、生徒自身が議論をせずに従うことに我慢できなかった。生徒総会に出席してもらったため、校門で同級生らを引き留め、定足数の確保を目指した。

源氏物語研究者で元東京成徳短大教授の川島絹江（68、72年卒）は「熊女の修学旅行で行った京都が人生の道標となった」と語る。

自由行動で川島の班は「三尾」と呼ばれる梅尾山高山寺、榎尾山西明寺、高雄山神護寺を巡り、清滝川沿いを鳴滝まで歩いた。川端康成の小説「古都」のヒロインも歩いて登った神護寺で古びた5体の仏像に心を奪われた。後に国宝「五大虚空蔵菩薩像」と知る。

埼玉大の卒業論文は鎌倉初期の源氏などの評論「無名草子」。筑波大院で源氏研究を深め、多くの

大学で30年近く源氏を講じた。若紫巻の「北山ながし寺」がどこか長年調査を続け、「神護寺」とする新説を昨春、発表した。

犯罪と文学の関係を切り口に19世紀フランス社会を研究する富山大准教授の梅澤礼（42、98年卒）。九州への修学旅行を前に校則を確認すると、服装は「スカートかズボン」とあった。早速、紺色のズボンを購入。長崎県佐世保市のハウスステンボスに入場するとき、引率教諭に間違われ、「先生はちょっと待ってと言われました」と笑う。幼少時代から「他の人と違うことがしたい子」だったが、このとき、「他の人と違っていいんだ」と確信した。

上智大でフランス文学を、留学先のベルギーとフランスで歴史学と犯罪学を学んだ。パリ第一大のサントリー学芸賞などを受賞した著書「囚人と狂気」を手にする梅澤



石原が実践してきた活動は中学の道徳教科書に実名で載っている



先生に「文学と犯罪を研究したい」と相談すると「誰もやっていないから面白い」とほめられた。

松山女子、滑川総合の両高校の書道部を強豪に育て、「書の甲子園」で2回の全国優勝、3回の全国準優勝に導いた書道教諭、石原裕子（61、79年卒）。書道で生徒に達成感や輝きを味わわせたい、と大人気で音楽にのって巨大な紙に書く「書道パフォーマンス」の草分け的存在である。

鈴懸祭（文化祭）ではクラスの出し物に力を注いだ。2年のとき、「みそおでん屋」を提案。温めたこんにやくを切って、家でつくった手作りみそをぬるだけ。売れに売れて、途中からこんにやくを薄くして急場をしのいだ。3年時は大学入試の共通1次試験「元年」に備え、鈴懸祭が例年より早い9月初旬に。熊谷の9月はまだ暑い。浴衣姿の「かき氷屋」を思いつき、2年続けて級友たちと楽しい時間を謳歌した。敬称略